

ある地域人の生活観察
「めんたいこ」と「しゃけ」との話

● Text : kana yamagishi

山岸 加奈

フリーライター

「めんたいこ」のブランド化を検討する仕事をしている友人と飲んでいるときの話。

辛子明太子の味にも違いがあり、昆布だしやゆず味、無着色なもの、老舗料亭が作ったものなど様々あるそうです。さらに「だしが染みている皮の部分が、一番美味しい!」。めんたいこが身近な人たちにとっては、皮を食べることが当然でした。

めんたいこの“ぶりっ”とした張りのある皮にするために、職人は調味液の調合方法や漬け込む期間を考慮するなど、こだわりを持っていると知りました。でも、誰がそのような皮の張りを教えてくれるのでしょうか? 福岡空港でお土産販売のおばちゃんは、そんなことを説明したり、話したりしてくれませんよね。

正直、私は、たらこやすじこの皮をそいでいました。無論めんたいこの皮も。私のような方々が、北海道にはいるのではないかと思います。

九州の知人にお歳暮として旬のしゃけを送って、ちょっと失敗した話。

「食べ方がわからない」とは言われませんでした。が。「鮭は、バサバサしているからあまり食べないんだけど。でもバターで焼いたら、しっとりして美味しかった」と。社交辞令ではなく、はっきり言われてよかったです。

北海道の朝の食卓には、しゃけが出てくるのが普通かと思われま。日本海やオホーツク海、太平洋沖の魚身は、筋肉質で身がぼろぼろとほぐれる。これが美味しい!とっていた私。

どちらかという九州は、玄海沖の青魚やあじなどがなじみの魚であり、しっとりしている青魚の身や小魚が身近な存在で、しゃけは食べ慣れていなかったようです。ちなみに、九州で知り合った人たちには、北海道の海産物といえば、「かに」とのこと。

その反動か、つつい北海道産びいきになってしまいます。「旬のしゃけは特に美味しいですよ。皮と身の間には脂がのって、皮をかりっと焼いていただくと、さらに美味です!」と話すと、意外な「え?」の反応でした。私が当然と思っていることが、九州ではそうではないらしいです。いや、もったいないですよ。

これから10回の連載を通して、地元では「当然と思っていること」「当たり前のこと」を、他地域の人に説明することの大切さ。九州に住み始めて見えてきた、北海道の良さ・悪さ。この2点を考えながら、生活者の視点や立場で話していきたいです。



福岡市の西新商店街。
その通りに露店が朝から夕方まで立ち並ぶ

地元の人たちの元気な底力

九州は7つの県に分かれています。それぞれ自分の県が一番だと思ひ、他県に対する競争心があるようです。田舎町に行けば、おじさんやおばさんからよく話し掛けられ、お国自慢も始まります。

一方、福岡市内で他県のナンバープレートをつけていると、なんだか優遇されているような気がします。偶然に、福岡で熊本ナンバーのレンタカーを運転したときのこと。もたもたと駐車していると、私が困ったのではないかと思ひ、「どうかしたの?」と話し掛けてくれました。どうやら、他県からの人には親切心が芽生えるような面もあるようです。

イタリアで出会った人たちに似たような感覚、人と人の距離の近さを感じます。

ネットで情報収集できる社会にもかかわらず、ローカル新聞の記事には、小さな地元の活動が丹念にひとつひとつ掲載されています。

また、フリーペーパーの数も半端ではありません。コンビニ、地下鉄駅に設置されたり、自宅のポストに、新聞のチラシの一部に入っていたり。区単位の情報誌、女性対象や結婚情報のフリーペーパー。商業施設・商

店街のイベントの情報、飲食店のセットプラン、小旅行のプラン、地域の活動イベントの参加知らせ、求人募集など、ありとあらゆる種類が存在しています。これらのコミュニケーションの発信方法には北海道とは異なる“魅力的な何か”を感じています。この積極的な発信力の源がなんであるのかを探ってみたいです。

北海道らしい春の到来

熊本県の黒川温泉近隣の山の麓に、やっと雪がちらちらと降り始める2月に、道路脇には梅が咲いていました。3月になるといちご狩り、黄砂、気温15℃など、もう北海道の5月並みの季節到来です。北海道生まれの私には、なんだか調子が狂ってしまいます。

一方、雪がずっと積もった北海道の3月、新千歳空港を降り立つと、顔がぴりぴりと刺すほどの寒さを感じます。雪景色のなかの温泉・露天風呂は、格別です。「これが北海道だな」と、いつも思い、ほっとします。

雪解けの道路は、確かに多少汚れていて、雪を初めて見る観光客はがっかりするかもしれません。しかし、雪が溶け始めるとともに、草木が芽吹く時期、タンポポ、ふきのとう、たらんぼの芽、梅も桜もスイセンも、一斉に咲きます。この時期には皆さんも「やっと春らしくなってきたよね」と周りの人たちと、季節の移ろいを感じているのではないのでしょうか。

北海道の人々は当たり前と思っている、春の到来で一気にな変わっていく様子、広大な風景の変化が、いかに北海道らしいか。

九州は、平地が少なく、山々が連なり、その盆地に町が存在します。道路の幅も狭く、北海道のような一直線の道路も、広大な風景も、なかなか見つかりません。堂々と存在する自然環境や風土、人たちの生活を含めて、広大な風景は、実に北海道らしさを象徴していると思ひます。

● Profile

山岸 加奈 やまぎし かな

札幌生まれ、福岡在住。フリーライター。
イタリア国立フェラーラ大学建築学部留学、北海学園大学非常勤講師、北海道景観審議委員、北海道大学博士後期課程満期退学。仕事のために生きるのではなく、おいしい食べ物や飲み物をいただくこと、いろんな人との対話を持ち、豊かな生活を送ることが大事であるという信念を持つ。